

備える。

準備。予備。整備。突撃。守備。警備。
 そなえる…用意する。そろえる、用心する
 防備。常備。完備。不備。具備。戦備。
 そなえ…したたく。用意。警戒。防衛
 備品。設備。備蓄。備置。備考。備忘。
 そなわる…準備ができる。身に付く
 ●●●ソナエ アレバ ウレイナシ!



かわさき
 防災広報紙

昭和59年7月30日発行
 編集・発行：
 川崎市土木局防災対策室
 〒210 川崎市川崎区宮本町1番地
 TEL.(044)200-2111内線2841



発行にあたって―都市災害といわれ、都市に生活する人の多くが「他人ごとでない」と、大きな関心を持った昭和53年6月の宮城県沖地震。その恐ろしさが人びとの記憶から遠ざかろうとしていた昨年の5月には日本海中部地震が発生し、大きな被害をもたらしました。これは、災害への備えをやらせると忘れがちな人間に対し、自然が打ち鳴らした警鐘とでもいえるのではないのでしょうか。わたしたちは、こうした過去の災害が残した何ものにもかえがたい教訓を、決して忘れることなく、家庭で、職場で、そして地域で、何をなすべきかを共通の課題としてとらえ、日ごろの備えを充実しておく必要があると思います。この地道な取り組みに必要な事柄を皆様にお知らせするため、このたび防災広報紙「備える。」を発行することにいたしました。災害に備える「小さな出発」のために、少しでもお役に立てば幸いです。

川崎市長 伊藤三郎



未知の災害に備えて、小さな出発を。

まず、できることから。いま、ここでできることから。

子どもたちのために。

おじいちゃん、おばあちゃんのために。

自分のために。

わたしたちの町のために。

ふたりのために。

オロオロする心のために。

〈天災は忘れたころにやってくる〉のために。

一番大切なもののために。

まず、できることから。自分、自分でできることから。

地震防災一声運動

火はたいしょうぶですか?

けが人はありませんか?

「ある日、突然」わたしたちの町を襲う地震。自分の家は大丈夫でも、近所はどこかで、家がつぶれ下敷きとなったり、けがをして逃げ出すことができない人がいるかもしれない。火が出れば、尊い人命が失われるばかりでなく、自分の家にも燃え移り大災害になります。

地震のときは、火は安全か、けがをされた方や助けを求めている人がいないか、となり近所で声をかけ合うようにしましょう。

9月1日の「防災の日」には、
 「地震防災一声運動」を
 全市いっせいにを行います。

9月1日は、「防災の日」です。川崎市では、総合防災訓練の一環として、「地震防災一声運動」を、川崎区東扇島における六都県市合同防災訓練の中央会場訓練、川崎駅周辺の混乱防止訓練、各区ごとの街角防災訓練などとともに、全市いっせいにを行います。

町内会・自治会などを通じて、この運動のシールをお届けします。ぜひ家でできる防災訓練です。ぜひこの「地震防災一声運動」に参加されますようお願いいたします。

なお、開始時間は、川崎区東扇島で行われる中央会場訓練に合わせて、9月1日の午前11時58分をお願いいたします。

六都県市合同防災訓練

ひとたび大地震が発生した場合、私たちの住んでいる首都圏が受ける被害は計りきれないものがあります。

東海地震や直下型地震の発生が懸念されています。この大地震の発生に備え、川崎市をはじめとして、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県そして横浜市、六都県市が協力して、広域的な防災体制の充実と防災意識の高揚を図るための訓練を毎年行っております。

今年も、川崎市が中心となり9月1日「防災の日」に、川崎区東扇島で合同防災訓練を行います。

夏です。海です。津波？

夏…。海水浴や釣りなどで海辺や海の近くに
出かける機会が多くなります。
そのとき地震にあつたら、津波を警戒し、
まず避難し、ラジオなどで
情報を確かめましょう。

津波に備える。

●日本海中部地震の
「津波災害」が教えるもの

川崎市は、市南部の臨海地域を除くと、
海に面していません。しかも、外洋と
ちがひ、東京湾内であるため、地震が
起こっても津波による住宅などへの被
害は少ない、と考えられています。ま
して、丘陵部の地域では津波の心配を
する必要はありません。

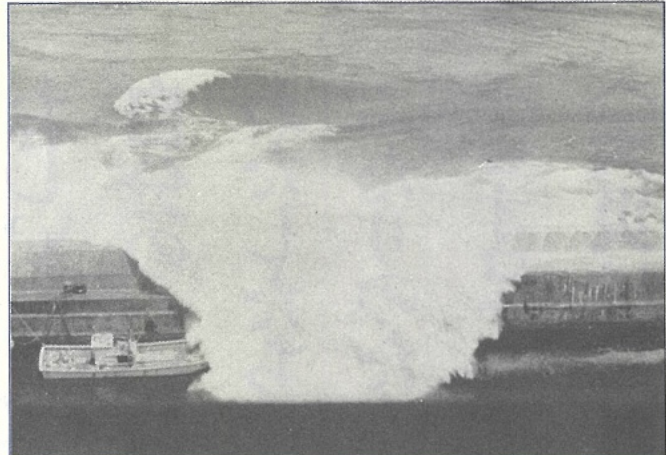
しかし、秋田・青森県地方を襲った日
本海中部地震によって発生した津波で
は、次のようなことが大きな問題にな
りました。

●津波の心配がほとんどない、といわ
れていた地域のため、あまり警戒をし
ていなかったところへ、地震発生後約
7分で津波の第一波が襲ってきた

●津波警報発令前に津波が襲ってきた
●津波による犠牲者の多くは、遠足の
子ども、釣り人、観光客、工事関係者
などで、地元の人はいなかった

とりわけ、海辺への遠足を楽しみにし
ていた山村の大ぜいの小学生たちが、
不幸にして津波の犠牲となったことは
わたしたちの記憶に新しい「悲しい出
来事」です。

海辺や海の近くに出かけるときは、く
れぐれも、津波への警戒を忘れずに。



島漁港を襲う津波。(佐々木文雄氏提供)

1983年5月26日。長い一日だった。 そのとき、あなたは？

11時59分57秒(地震発生)
マグニチュード7.7
震源地—北緯40.4度
東経138.9度 深さ5km
震度—5・強震(秋田市)
のちに、日本海中部地震と
命名される

何もできなかった—19.6%
何もせず様子を見た—31.8%

日本海中部地震が起こったときの「と
つきの行動」は別表の通りです。あな
ただったらどのような行動をとったで
しょうか。心がまえができていたか否
かでは、「その時」に大きな違いが出ま
す。ふだんから家庭内の危険な箇所の
チェックや、小さな地震でも火を消す
習慣をつけるなど、身の回りできる
小さなことをお忘れなく。

●外にとび出した	48.2%
●机の下などにかくれた	11.5%
●火を消した	32.4%
●戸を開けた	27.3%
●お祈りした	6.9%
●車をとめて様子を見た	3.7%
●何もできなかった	19.6%
●何もせず様子を見た	31.8%
●その他	11.9%

(複数回答)
日本海中部地震にみる「とつきの行動」(同地
震における人間行動)(東京都調査報告から)



非住家であるが基礎が悪かった。(三浦敏雄氏提供)

★応急手当 レッスン① やけどに備える

●すぐ、冷水で冷やすこと
やけどの手当てで大事なことは次の3
点です。

- 感染の防止
- 苦痛の軽減
- シヨックの防止

そのためには、手当てを清潔に行うこ
と、できるだけ早く、冷たいきれいな
水で冷やすことが大切です。

①すぐに冷やす。できれば、水道の水
などきれいな冷水をかけて冷やす。

※患部に直接強い水圧をかけないこと
※多量の水がないときは、清潔な布に
浸して患部にあてて冷やすこと。

②十分に冷やしたあとは、細菌感染を
防ぐため、滅菌ガーゼや清潔な布で患
部を覆います。

※脱脂綿のような細かい繊維のものは
使わないこと。

※水ぶくれはつぶさないこと。

※みそ、しょうゆ、ジャガイモをすつ
たものなどを絶対にぬらないこと。

チンク油なども、あとで治療の妨げ
になります。

③衣類の上から熱湯をあびたときは、
ただちに、衣服の上から水をかける
か水に浸して冷やす

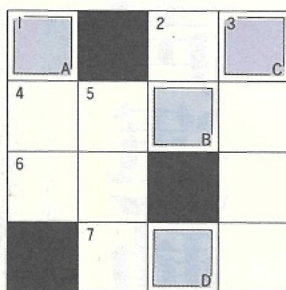
●衣服は脱げれば、手早く脱ぐ。1秒
でも早く密着したところを離し、熱
を伝えないようにする

●十分に冷やしたあとに衣服を脱がせ
ますが、そのとき患部をこすって悪
化させてしまいうような場合は、ハサ
ミを使って切り開きます。皮膚と衣
服がくっついて残っている部分は、
そのまま切り残しておくこと

また昭和14年の男鹿地震の時は、
ゴーツという音と共に地震が起きた
が、今回は揺れは大きかったものの
音はしなかった。無言で押し寄せた
津波、その恐ろしさを子々孫々まで
語り継がなければならぬと思う。
湯之尻では人的被害の無かったこ
とが不幸中の幸いであったが、他の
地区では多くの犠牲者があり残念で
ある。その方々のご冥福をお祈りし
て筆をおく。

まざまざと見せつけられたのである。
津波がもう少し北側から来たら、
湯之尻部落は半分くらいは波に吞ま
れたのではないだろうか。また、港
が整備され、防波堤が築かれている
ので、これによっていくらかは津波
の力が弱められたこともあると思う。
港のお蔭と思う今である。
後で見たが、近くの門柱や火の見
やぐらのぬれた痕跡から5メートル
ぐらいの津波であったと思われる。

また昭和14年の男鹿地震の時は、
ゴーツという音と共に地震が起きた
が、今回は揺れは大きかったものの
音はしなかった。無言で押し寄せた
津波、その恐ろしさを子々孫々まで
語り継がなければならぬと思う。
湯之尻では人的被害の無かったこ
とが不幸中の幸いであったが、他の
地区では多くの犠牲者があり残念で
ある。その方々のご冥福をお祈りし
て筆をおく。



★答えは紙面左側

クロスワードパズル

クロスワードを解いてA-Dの文字を順に並
べるとひとつの言葉になります。答えは？
△ヨコのカタギ
②地震のときは〇〇〇〇をかけ合いました
④地震、〇〇〇〇〇、火事、おやし
⑥万有〇〇〇カ
⑦石灰のこ(オランダ語)。〇〇〇〇〇〇水
⑧テテのカギ
①敵襲・火災などによる被害を少なくするた
め、集中している人や物を分散すること。
〇〇〇〇〇
②小さい粒。〇〇〇
③大流行。〇〇〇〇〇トカゲ
⑤多摩区にある日本〇〇〇〇園

ボクサイ 高野君



体験談 その1 ま近に見た津波の恐怖



松山真一さん(54歳)
男鹿市北浦湯之尻

地震が起きたときは、昼食のため
家にいた。まさか津波が来るとは、
私ばかりではない。誰もが考えな
かったことと思う。ところが、そのま
さかがやって来たのだ。

子供や年寄りたちを山へ避難させ、
少し高いところで海を見ていた。そ
れはテレビで大津波警報がでたから
である。

12時15分、その時はまだ津波は来
ていなかった。その15分というのを
何故かはっきりおぼえている。次の
瞬間、海が真白になって来た。西方
向にあたる入道崎の方からやって
来た白波は、あつという間に漁民研
修センターを破壊し、ハタハタ船を
流し、港付近に駐車していた自動
車を呑んだ。

それは、私の記憶からすれば12時
18分頃と思う。

そしてもう一回大きな波が押し寄
せた。大きな波はこの二回であつた。
ほんとうに恐ろしいと思ったのは引
き波の力で、車などが流されていく
さまは、言葉や文章でなんと表現し
てよいかわからない。港の底がす
っかり現われてしまうほどの引きか
たである。

大きな波は二回あつたと書いたが、
一回目は海が一面白波となって来た
が、二回目は海が大きくふくらんで
来た。港の中にいた船はすべて破壊
されてしまった。あの大きな重量の
あるテトラポットもオモチャのよう
にころがされた。津波の力の強さを